

## その歩みよし遅くとも

―わが職員わが利用者に告ぐ―

任運騰々

五月祭が回り来ました。二つの施設それぞれに50人ずつ、職員も35人と25人、160人の皆さんに語りかける五月祭は、私にとつて最良の日です。もはや、いつもこれが最後の挨拶と自分に言い聞かせて皆さんの前に立つのです。仏教で「無常迅速」という言葉があります。木樹が生命に輝く5月、17年前に任運荘が生まれます。3年遅れて重度障害者施設騰々舎が続きます。2者合わせて「任運騰々」。

騰々舎が発するまで、大分県には心身両面の障害に苦しむ人たちが利用する施設はなく、この人たちこそ真っ先に利用できる施設がよいされねばと考えて、「最重度最優先入所」の騰々舎を実現したのです。

さて、任運騰々―この言葉は高僧良寛が生涯をかけて追究した道です。師国仙和尚が晩年死の近きを覚悟した時、良寛のために山に入り一本の杖を作り、それを渡し

てこう言いました。

「良寛よ、お前は独自の道をしっかりと会得した。もうこの寺に居ることはあるまい。お前の道をいよいよ極めるために諸国を遍歴せよ。この杖を引いて任運騰々、世俗を越えて見事に生きるのじゃ」

人は運命をのがれて生きることができない（任運）。しかし、運命にまかせて生きるのも人間の道ではない。どんな運命の下でも志を高く強く意気とうとうと積極的に生きゆくのがまっとうな人間である（騰々）。二つは別々にあるのではない。二つは1つ、任運即騰々である。良寛は師のこの教えを生涯にわたって実践したのです。

## 6項目のある施設

任運荘と騰々舎の職員誰にでも聞いてみよう。任運荘とは何か？と。彼らは一言でそれを示します。「6項目のある施設です」と。

(1) 利用者の自由を一切束縛しない (2) おむつは濡れたら早めにとり替える (3) 床ずれゼロ (4) 悪臭なし (5) せめて間仕切りカーテン活用で雑居生活の中のプライバシーを何とかまもる (6) 利用者の異常行動は介護する者の責任である。

この6つです。生活をする施設であれば、誰がみてもこの6つは当然なことです。しかし、残念なことに現実はこの6つの実現のためには、私たち2つの施設の職員の献身的な努力が前提とされています。少しの油断で、一夜のうちに崩れてしまいます。床ずれなどは数時間の手抜きで発生します。

特養ホームではおむつは命です。

任運荘の随時交換―時間を決めて換えるのではなく、母がわが子のおむつを換えるように、濡れてはいないかと早めに換えることです。それと床ずれは作らない。この2点実行は意外にも全国的評価を受けてきましたが、ごく当然のことでした。

これら6つの項目は私たちの旗印です。強い人には外から見える旗印は必要ありません。弱い私たちは皆のみている所で旗印を掲げ、自分を励まし、実現を誓っているわけです。

## 寮母は宝

「寮母は宝」―これは施設運営の私の信条です。家に母、施設に寮母。母なくしてよい家庭はない。よい寮母なくしてよい施設はない。これがホーム運営の眼目です。施設運営の行き着くところこの結論しかありません。

さて、任運荘、騰々舎共に寮母室に全寮母と看護婦、相談員（指導員）が一緒にいます。直接おせわに当たる現場の人たちが一緒にいることは計り知れない利点があります。だから、「寮母室は宝」といい直したほうがより正確です。

施設的全職員が宝であることに変わりない、寮母だけを宝というのはまちがいで、という反論が強く寄せられます。それはまちがっています。全職種の職員が宝です。全部がそうであれば、とりたてて「宝」ということはありません。だからでしょう。日本でわざわざ「寮母は宝」と言っているのは、たぶん、わたし一人でしょう。

私事をのべることを許して下さい。私は8歳の時母に死別しました。子の誰もが母を思うように、よい母だけの印象がありません。その上、父は「お前のお母さんは生きていた時から神様のような人だった」と私たちに言い聞かせていました。その一言が、私のそまつな一生ではあります。心の中でひそかに輝き続けています。

家の中で、父も、祖母も、そして皆で「よいお母さんだ」と支持感謝する心が漂っていると、その家は完全です。母と全く同じように直接おせわするのが寮母です。施設の利用者皆さんを生かすも殺すも寮母しだいです。たしかに悪い寮母もまじりがちです。しかし、寮母とはよい母の如くよい寮母でなければなりません。それが絶対条件です。

直接お世話する寮母職をめぐって、看護婦、相談員の仕事、食事作りの仕事あり、事務の任務がある。これらの職種が円満に協力しあうなら、利用者は安全快適な生活が保障され、施設は完全です。寮母職に協力するのみにあって、他の職種は「宝」でありうるのです。逆に寮母が事務室のお茶くみをさせられるなど、事務室優位のひどく退廃したホームもあります。

施設はどこを向いても危険いっぱいです。構造的に、建物の構造だけでなく、福祉施設の仕組み全体が利用者への危険がいつも控えています。こう申す経営者の私が毎夜、枕を高くして寝ていられるのが不思議なくらいです。2つの施設がそれぞれ17年と14年間も事故らしい事故もなく今日まで来ているのが不思議です。私が言う過失、事故とはすべて利用者の安全、快適さに関することです。それは日夜、かげひなたなく献身している寮母の働きがあるからです。げにも「寮母は宝」。私は今後も言い続けます。それこそが「利用者本位」の実をあげる原動力だからです。

先年退職された三代茂子さんが言われました。「理事長（吉田のこと）は寮母は宝と言われるが、ホームでの本当の宝は利用者たるお年よりです」と。その通りです。お年よりが実際に宝であるかどうかを実証するのは寮母しだいです。宝のような寮母が存在するのでなければなりません。管理者側へのみ顔を向け、事務室にペコペ

コしている寮母集団では利用者本位があるはずがありません。

そのことを一番知ってほしいのが、わが2つの施設長たち、そして、中間管理職たちです。

「和を以て貴し」とせず

騰々舎の利用者は要求や注文を遠慮せずに出し、時には職員を名指しで批判する。だから寮母側もその対応に緊張感を失わず、利用者の自治活動は相当の水準に至っています。福祉施設のあるべき方向を明示しています。朝日新聞（西部本社・H4・）も評価しました。

それと対照的に、お年よりは要求極めて控えめで、寮母のするままを受け取っています。だから、おせわが情性に流れ、欠点があっても気がつかず、修正もせず、つもりもってその被害をお年よりはもろに蒙るのです。マンネリ（惰性）ほど恐いものはありません。一部がその欠陥に気づいても、言い出せない空気が立ちほだかっています。

状況は大きく動いています。利用者の重度化は急速です。困難な条件下で秀れた施設があちこちに誕生しています。任運荘の往年の名声（？）は今や空名に瀕しています。もちろん名声の維持なんてつまらないことです。ただウソを押し通すことだけは避けねばなりません。い

つも白日の下に行動すべきです。

任運荘に今一番必要なことは、職員わけても寮母の「知」です。考えることです。マンネリからの脱出です。合理的精神です。指示されたことをそのままし続けられよいという段階は過ぎました。おせわに改善、改革が必要とされています。よく考えてする人、それが新しい寮母像です。

新しく知りえたこと、工夫したことを皆に発表し協力を求めることは、勇気がいります。知と勇気です。ことなかれ主義の職場雰囲気の中でこそ、それらが必要とされています。工夫改善には各人の新たな努力がいりませ。経費もかかります。組織がえもあるでしょう。だから、管理者側の喜ぶことばかりではありません。利用者本位に立つとき、この勇気をふるい起こさざるをえないでしょう。

よく多くの職域で「和が大切」と言います。これは聖徳太子の言葉です。ややもするとこの言葉には管理者側、支配者側、体制側の都合のよいものになりかねません。和合するに値する内実があつての和であれば、和は最高に貴い徳目です。しかし、和の名目の下に支配と差別がかくされていけば、それは悪です。

真実を以て貴しとなすと、私は言い替えたい。真実とは何か。真実の尺度は何か。明白です。わが施設を終の住み処とする利用者のためになること、その一点だけで

す。床にしつかり眼を注ぐことです。

長い話を終わらねばなりません。最後に利用者の皆さんへのお願いと期待を述べて終わります。

### お返しのある生活

先日、騰々舎の三浦志奈代さん（前自治会長）からお便りをもらいました。彼女は言葉が不自由なので、ワープロで私に語るのです。「騰々舎は私の大切な家です。大事に守っていきます」と。職員の温かいお世話に感じて、生きるめあてをそこに定めているわけです。

最年長の河原茂一郎さんは生い立ちの記で「私は7年前に死すべき命、任運荘に助けられました。任運荘は私の命です。私の神様です」。

私たちにとってこれほどの報いはありません。不十分なお世話に全生命を上げて感謝されています。お世話する方もされる方も互いに感応しあう。そこに本当の施設の姿が見られるのです。片方に過剰サービスがあり、片方に当然視して受けるだけ―そこには貧しい人間の生活があるだけです。何もかもタダの生活、それを当然視する生活は人間の精神をただ貧困にしていくだけです。施設は乞食根性を作る所ではない。お釈迦さんは何ももたない人間でも、何もできない人間でも、一番大切な宝ものをもっている、それはやさしい眼つき、和やかな

顔、温かい声だと教えています。それは生かされていることへの感謝の心から自然に生まれます。

幸くてませよ

さあ、職員も利用者も180人力を合わせて、たとえ貧相な施設であろうと、楽園建設を夢見ようではありませんか。久住山を見はらすこの高台の一角に、私たちは黄金なす宮みを明日も続けゆくことでしよう。

しかし、私はもう先頭に立つこともないでしょう。やはり良寛にならって、「いざさらばさきくてませよ」と祈ることしかできないと覚悟を決めています。

(1992年五月祭の講演より)